

武将の生れ変りは女

島 節子

日本初の観光ガイドを別府住民として覚えておきたいと永年思っていた。

ふとしたきっかけで、昨年（九年）の夏、資料を入手した私は昭和初期の不老暢人の別府観光ガイド七五調をあっという間に覚えた。特に大好きな一節の、

「ここは石垣原の古戦場、三百三十余年前、慶長五年の秋九月、南軍大友吉統は黒田如水の北軍と五日にわたりて激戦し、武運つたなく南軍の武将吉弘宗幸は『明日は誰が、草の屍や照らすらむ、石垣原の今日の月影』と辞世の歌を読み捨て、あたら陣頭の露と消え、のちの世に忠烈の名を残せし所でござい
ます」

と一語一句正確に覚えて皆の前でご披露しては、女学生のように、どこにいても手がすいた時は、まるで英語

の単語を覚えたあの乙女時代のように、ガイドの文句をムニヤムニヤ言いながら楽しく過ごしていた。

そんな頃、新聞で別府史談会主催の『別府の石垣原古戦場を尋ねる』という記事を読み、暑い夏の日、何はさとおき行きたいと連れ合いと共に参加したのだった。

いつも車で通る道路ぞいに、私の胸を打つすごい遺蹟があることに驚愕させられた。

こんなに身近かにある遺蹟を見過ごしていた自分を反省しつつ、案内の話に聞き耳たてていた。

目を閉じて話を聞いていると目に浮かぶ石垣原の戦いが私の胸にせまる。

実相寺山頂から眺めた景色は四百年前の戦場が一望でき、講師の説明に、堀田の山に陣を敷く大友軍と実相寺の山に陣を敷く黒田軍、各陣営の陣旗が風になびく音が

聞こえるようであった。

瞑想する私の頭の中には、四百年前の私の姿がそこに見える、私の想像力は何かを書きたいという思いにかられた。

そして同じビルに住む隣人との偶然も手伝って書くことにした。

私は、楽しみながら小説風に書いたのである。

題

武將の転生は女

「血がたぎる」何かにつけ、人一倍血がたぎる。私の体は生前、男ではなかったかと思える。

薩摩の士族を誇りとする。明治生まれの父の口癖は

「士族は眠くない、士族はお腹はすかないのだ」

そんな言葉や中国古事や格言を交えて私を説教する父に私はいつも

「時代が違う」

と反発ばかりしていた。幼い頃からのそんな説教は、父

が亡くなってから私の体に自然な姿で入ってきた。

人一倍誇り高い父の血が私の体の中でたぎっていた。

子供を三人生んだ三十代前半の頃、

「薬屋さんになる免許を取れ」

という舅の命令にいやといえない良い意味での私の見栄っばりの誇りは、三人の子供を寝かせつけた午後十時からの勉強で始まった。

P T Aと育児と、嫁ぎ先の稼業の店番と三十数名の生徒のピアノのレッスンでクタクタの体には、毎日四時間と決めた勉強は眠くてたまらないものであった。

そんな時はいつも父の憎らしいほどの説教が蘇って気持ちだけは高揚し、目をこすりこすり勉強した。

たしかカーフェーズソフトという眠けのこない薬を飲み、二年がかりで合格した時は、怠け者の私の体に父が乗り移って、勉強させてくれたという思いであった。

数年前に大友本陣祭りの司会に行った時、私の体を何が吸い寄せているかのような不思議な感情が漂っていた。

そこのお世話を永年している七十うん才という芸名桶

左近さんとの出会いは、私の眠っている感情を呼びおこしてくれた。

浪曲師として退職後の余生を謳歌し、タレント並みの忙しさである。浪曲の詩を自分で作り、ご披露されるので、各町村の慰霊祭には重宝される人材である。

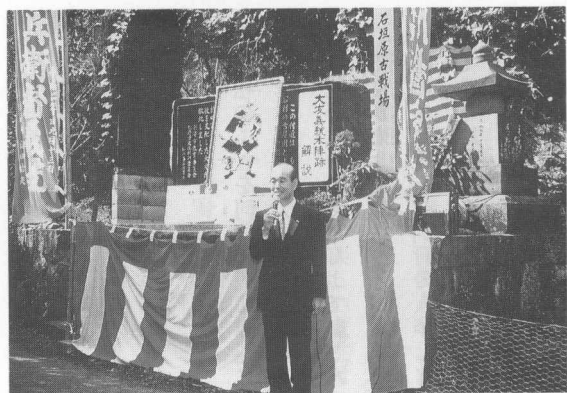
ある日、私は山香町の勢場ヶ原の戦いの歌を作ったので、楽譜に書いて伴奏を吹き込んでほしいという依頼があった。自分の作詞作曲以外のものは当然断るはずの私が二つ返事で引き受けてしまった。

私の家に来た橘左近さん（史談会会員の沼田岩夫氏）は、作詞された歌を歌われた。若者のように、頬を紅潮させながら無心に歌う姿に私は感動した。その姿はとても七十代とは思えぬ、燃えてる青春の人であった。

私の気質と似ているその人と何かしら同じ戦士であるかのような感情になっていた。私は一日で楽譜と伴奏を仕上げて橘左近さんにさしあげた。

ある朝、家を出掛けようとしていると、久し振りの友人からの電話が掛かった。私は

「大友黒田両軍の武士追悼のための本陣祭りに出掛け



本陣祭

友人たち二人に何かしら因縁めいたものを感じた。参加者の人数は三十名ぐらいで、そのなかに現在の武将といわれてもいい県議会議員、市議会議員が五名も集っていたのである。

選挙の度に戦国の世のような戦いをしているのだから

留守するので、御免なさい。又のお越しを」と電話を切って会場に行くと、その電話の友人は友達を連れて、本陣祭りの場所に来てくれていた。そして興奮している友人とその友

「大友軍の家紋は実家の家紋といっしょだね、この友達の家は黒田軍の家紋ですって」その場所に足が向いた

選挙を通して、彼らを現在の武将と私は思っているわけだ。

石垣原合戦より百年後の元禄七年、この地を訪れた貝原益軒が

「石垣原は古戦場ゆえ、雨の夜には今も幽界をさまよっている士（もののふ）のむせび泣く声がすると里

人言えり」

と書き記した『豊国紀行』やそれに関する文献を読むにつけ、昔の武将になりきった私はその場を見たかのような気になってしまうのである。

その後、速見郡山香町の歴史祭りのお誘いを受け、「勢場ヶ原の戦い」を知り、そして又「戸次川の合戦」こと鶴ヶ城合戦のことを知ったのである。

浪曲での豊後と薩摩との戦いは、私の胸に残っていた。浪曲は幼い頃、父からいつも聞かされ

「時は元禄十五年、行く秋の虫の声」

と自然に覚えたものもいくつもあった。そんな私なので、浪曲大好きな古い女なのである。

浪曲の戸次川合戦は天正十四年秋十月、

「大友の一国を守るのに過ぎぬ力なき」と見た薩摩の島津義久は

「九州制覇は今なるぞ」

と軍勢四万六千を率い、豊後に攻め入った。最後の砦の鶴ヶ城の三千有余の豊後勢は善戦苦闘し、無念の涙をのんだ。

浪曲を聞いていると、四百年前の薩摩の若武者の自分の姿が見えるようだった。

私は薩摩軍の武将「金丸節之進光虎」、薩摩の士族であった実家の名字が「金丸」なので私が自分の名を命名した。

私のことを何と馬鹿な単純な奴と笑って読まれている人も多いと思うが、そこはロマンチストな私のこと、一人密かにその気になって楽しんでるのである。

父がもっとも誇りとする薩摩軍の子孫にあたる私が別府の人になり、別府の人がしない面を私の手で何かやってやろうと夢を持っている。

別府の町をいかにしたら昔のような活気ある町にできるかなどを考え、よなべ談義に花を咲かせて、私なりに

活動に燃えているのだ。

やっとこの度、何故薩摩育ちの私が遠いこの別府で燃えているのかという理由が見つかったのだ。

その理由はいい加減といえいい加減、こじつけと言われれば、こじつけかもしれない。しかし私は真面目である。

今私が住んでいる浜脇は別府の発祥の地で、前世の拙者こと私は戸次川の戦いに傷ついた体を温泉で癒し、薩摩に帰らぬまま没していったのだ。

私の前世の四百年前の若武者は結構女好きの武士であり、温泉と慰める女のいる所で傷が癒えても、情けの厚い浜脇の女から離れられずにいたのではないかと推察する。

ここまで読むと「馬鹿かこいつ」という目を一身に感じるが、まだ続く。何故なら私が血の騒ぐ別府の歴史と、ある偶然を書いてみようと思った動機となった話があるのだ。

薩摩で生まれて中学校まで鹿児島弁、高校は大分県、大学は東京と下宿や住まいは六回ほど変わったが、鹿児

島出身の隣人は何人かはいた。しかし始良郡……町……番地というにはほど遠い人々ばかりであった。

昨年度より、私は私の住むビルの互助会の副会長に就任した。会主催の掃除の朝、流暢な標準語の中に一ヶ所鹿児島弁の発音を発見したのだ。

上階に住むその美しい女性はこの八年、朝晩の挨拶を交わし合う人であった。

「もしかして鹿児島に住んだ事ありませんか？」

「鹿児島出身なのです」

「鹿児島はどちら？」

「始良郡」

「始良郡はどちらです？」

「○○○町」

この人私の事を知ってて答えてるな？と思いつつながら質問を続ける。

「○○○町の何処？」

「迫」

「迫はっち？」

「東」

「うそっ、本当？それは私の出身地よ」

実家周辺は現在かなりの人口になっているが、私が別府に来た三十年前には十軒ほどの家しかない別荘地である。

医師だった大叔父の別荘を父が買い、日本庭園の大きな庭のある私の実家の事をその人はよく知っていた。

話を聞きながら、私の体は猫のように毛が立つ思いがしていた。

転勤属の我が家は家をそのままにして、その地を離れていたの、その人に会うこともなかったし、父の休日
に庭の手入れに帰宅しても、年齢が五つ若いと子供時代の彼女とは遊びの対象にならないのである。

「大きな石橋のかかった池のある家で、つつじや藤の花が綺麗だったからよく遊びにいったものよ、あの家が貴女の実家だったのですか？」

私は永いあいだ探し続けた落とし物を見付けたような嬉しさに包まれて、私の中で一人よがりの思いに終止符を打つことができそうな、胸がすっとしてくるのが自覚できた。

きっと四百年前、この人と私の前世はいっしょに薩摩軍として豊後の国で戦い、深い傷を負って浜脇にとどまったのだ。そして八年前、このビルに入居と共にこの地へ帰って来たのだ。

互助会の役員になったおかげで、同じ出身の番地のその人を四百年ぶりにやっと思付けたのだ。

嘘みたいに聞こえるかもしれないが、この偶然は本当の話である。

そのうちきっと、その人も大友本陣祭りや歴史祭り、史談会などに参加する日があるだろう。本人にその気がなくても、前世からの因縁はその日を作ってくれるに違いない。

そして心の奥底に潜む武士道は私の体の中で生き続ける。

毎日多忙にして、殺伐とした今こそ、別府の歴史、大分県の歴史、九州の歴史を学び、しばし郷愁と悠久のひと時を大事にしたいものである。